

李 神 通 (上)

李通は、唐の皇族の大鄭王家の子孫である。賀の高祖父すなわち四代前の祖が、李孝逸であらうことを、わたしは拙稿「楞伽」で推定した。そのとき孝逸の父の李神通については少し触れただけだった。ここで、もういちどくわしく考える。孝逸について書きもらしたことも補っておくつもりである。

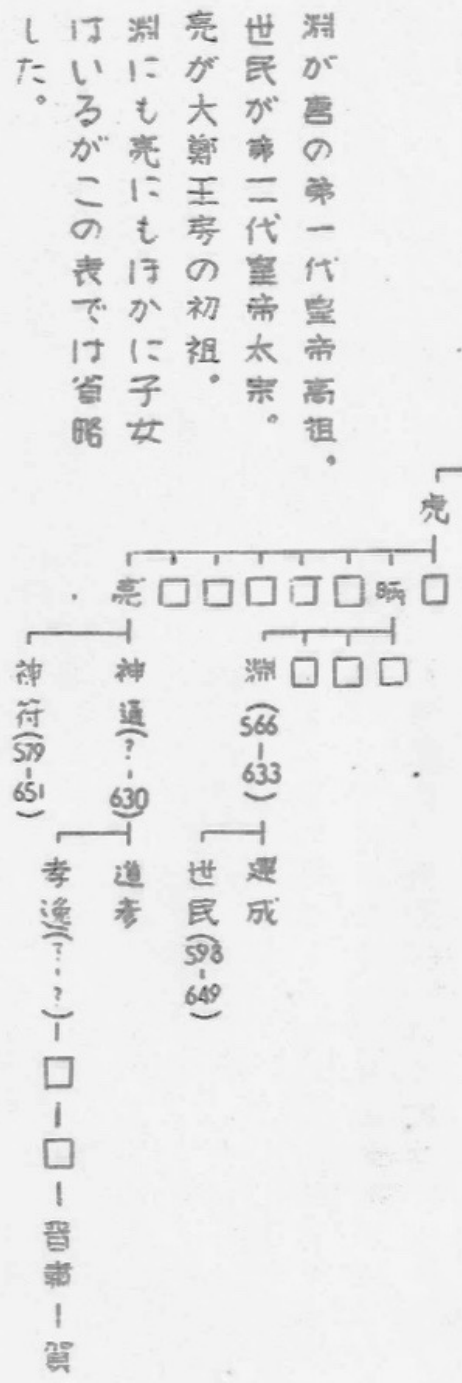
二

高祖神堯大聖大光孝皇帝は、諱は淵、字は叔慎、姓は李氏、隴西成紀の人である。その七世の祖の屬は晋朝末に秦・涼地方に拠って自ら王となった。これが涼の武昭王である。屬は款を生み、款は沮渠蒙遜に滅された。款は重耳を生み(重耳は)魏朝の弘農太守だった。重耳は熙を生み(熙は)金門の鎮将で武川に屯營しそこに家居した。熙は天賜を生み(天賜は)一軍の大將となった。天賜は虎を生み(虎は)西魏朝に大野氏の姓を賜り官は太尉に至った。

李弼ら八人が周朝をたすけ魏朝に取って代るのに功がありみな柱國大將軍となり「八柱国家」とよばれ（虎もその一人）、周の閔帝が魏帝より位を譲られたとき、虎は死んでいたが、その功績を遺録し、唐國公に封じ「襄」とおくり名した。襄公は昉を生み（昉は唐國公をつぎ、隋朝に入って安州總管柱國大將軍となり死んで「仁」と諡された。仁公は高祖を長安で生み……（高祖は）唐國公のおとをつぐ。隋の文帝の皇后獨孤氏は高祖の叔母である。だから文帝と高祖は親しかった。文帝が周の宰相となったとき、高祖の姓を李氏にもどした。……

『新唐書』巻一本紀第一の冒頭の文章である。この記事を説明する便宜上、唐の帝系と大鄭王房とのつながりを左に図示する。房とは家というほどの意である。

虎 — 欽 — 重耳 — 熙 — 天賜



淵が唐の第一代皇帝高祖。

世民が第二代皇帝太宗。

亮が大鄭王考の初祖。

淵にも亮にもほかに子女はいるがこの表では省略した。

唐の帝室の祖先を説明するのに『新唐書』を使ったのはその記事がすっきりしているからだ。けれども他の文献とくいちがうところがある。

李氏を「隴西成紀」の人というが『旧唐書』には「隴西狄道」の人とする。成紀とはいまの甘肅省天水県を中心とする地方をさし、狄道は、同じ省だが、天水から約二百キロメートル西北にあたる臨洮付近をさす。いずれにしても、このあたりは、唐についての説明にみえる「秦・涼」の秦に相当する地方だ。この地方には、早くから、漢民族といわゆる塞外民族とが雑居した。李氏が漢民族か塞外民族かは、よくわからない。塞外民族のひとつ鮮卑族出身という説が有力である。漢族だとしても、何代にもわたって鮮卑族と通婚しその習俗の中で生活していたとすれば鮮卑族出身でないと言いたてても大して意味のあることではない。

鮮卑はトルコ系の遊牧民族の一つ。前一世紀ごろから中国の史書にこの名があらわれ、戦国時代に秦胡といわれたものは鮮卑の祖先らしい。一世紀ごろから蒙古高森にすみしばしは中国の西北辺を犯し、晋代には慕容・宇文・乞伏・拓跋・秃髮など世襲君主をいたたく諸部族が強大だった。五胡十六国といわれるものうち、前燕(337-370)・後燕(349)・南燕(384-410)は慕容氏、西秦(385-431)は乞伏氏、南涼(397-414)は秃髮氏だ。また南北朝といわれるものうち北朝は、北魏(386-534)・東魏(534-550)・西魏(535)が拓跋氏(元氏と改める)、北齊(550-577)が高氏、北周(557-581)が宇文氏でいずれも鮮卑族であり、唐の前の隋(581-618)の楊氏もまた鮮卑系だろうといわれている。

さて李氏の始祖李暹については『晋書』卷八十七に伝がある。それによれば、暹は漢の名将李

広の十六世の孫だという。広の曾祖父の李仲翔が秦昌で戦死した。秦昌は狄道である。子の伯考が狄道東川に家居した。『旧唐書』が李氏を狄道の人とするのはたぶんここの記事を根拠とするのだから。高は東晋安帝の隆安四年^{四〇〇}。西涼を建て敦煌を都とし義熙十三年^{四一七}に死んだ。六十七歳だった。子の歆があとをついだが宋の少帝の景平元年^{四三三}に北涼の沮渠蒙遜と戦って戦死したという。ただ少帝の景平元年が誤りで武帝の永初元年^{四二〇}であるべきことは錢大昕『廿二史考異』^三三三にいう通りであろう。歆の子の重耳は敦煌が陥落したとき、逃れて南朝の宋に仕えたが、のち北朝の魏に仕え恆農(弘農と同じ)太守となった。『旧唐書』は、重耳が宋に仕えたことには記さない。恆農はいまの河南省靈宝県のあたりで、杜橋「負薪」にのべたように、李賀の父李晋肃が県令をしていた陝県に近い。

重耳の子の熙は金門の鎮将だったという。『讀史方輿紀要』^{卷六}河南・永寧県の「龍驤城」の条に「また県の西三十里に金門塢があり水経注によればもと宣陽県の県庁所在地だった。魏收志によると、東魏の天平初年に金門郡と金門県がおかれた」という。永寧県は賀の家居した昌谷の西約十キロメートルである。鎮将というのが魏の正式の官名だったのかどうかは知らぬが、隋唐の用例からすれば、地方軍隊の長で、徵賤の職である。熙はやがて武川に移る。武川は北魏の北方の要塞地帯で今の内蒙古自治区の武川県がその地にあたるらしい。そこでのかれの地位がどういうものだったかははっきりせぬが、この時から武川に住みついた。ついでながら隋の文帝の五代前の楊元寿が武川の司馬となってからその子孫は武川に家居した、という。

照の子の天賜を『旧唐書』は「天錫」とする。この人の生前の具体的な職名もよくわからぬ。天賜の第二子が虎である。『旧唐書』では虎について「後衛左僕射で龐西郡公に封ぜられた。周の文帝、および太保の李弼、大司馬の獨孤信らと共に、佐命に参画し、当時、八柱国家とよばれ、大野氏の姓を賜わった」という。佐命とは、建國あるいは天子即位に功のあることをさすが、『新唐書』の記事ならば北周の建國に功があつて八柱国家とよばれたのに、『旧唐書』の記事ならば西魏においてすでに八柱国家とよばれていたことになる。『周書』^{卷六}列伝への終りのところに八柱国家の説明があり、これが正しいのならば『旧唐書』の記事の方が正確なことになる。なお『周書』に記す李虎の官職名は、使持節太尉柱國大將軍都督尚書左僕射龐右行臺少師龐西郡開國公である。また、李弼は、唐の高祖と天下を争つた孝宣の曾祖父であり、獨孤信はその長女が北周明帝の皇后、四女が唐の高祖の母、七女が隋の文帝の皇后である。

虎の第二子暉が、唐の高祖李淵の父であり、第八子が大鄭王暉の祖李亮であり本稿の題として掲げた李神通の父である。史家は、このあたりから、そのレンズの焦点を李淵とその直系に合わせる。李賀は、正史の終つたところから活動を始める詩人であつた（拙稿「補遺」参照）。わたしもまた史家のレンズの焦点からはずれたところを凝視しなければならぬだろう。

三

前の章で唐の皇室の祖先について述べたが、そこで使った資料に關してひとこと記しておく。「晋書」は唐の太宗が、それまでにあった晋の歴史を記した書の出来がよくないと言つて、貞觀十八年^{六〇〇}房玄齡らに命じて作らせたもの。「魏書」は北齊の魏收が著したが、隋の文帝、唐の高祖が改修を企てており、現存する本にはその意図の幾分かが反映しているらしい。「北齊書」は唐の李百藥が太宗の命をうけて貞觀十年^{六三七}完成した。「周書」は唐の令狐德棻が高祖にすすめその名により十年の歲月をかけて作った。「南北史」は唐の李延壽が貞觀中に著し、「隋書」もまた唐の魏徵らが同じ時期につくつた。これらの正史にはすべて太宗の息がかかっている。文字に書いて流布してしまえば人はそれを事実として信じてしまうことを、太宗はよく見ぬいていた。そうして唐の朝廷は三百年のあいだ中国を支配した。唐の歴史を描いた新・旧「唐書」は別の朝廷で作られたが、その資料は唐朝においてすでに選抜したものが大部分である。このことをよくよく胸にとどめたうえで正史に向かおう。そこに並んだ諸記録をつき合わせてゆくと、くいちがうところがでてくる。くいちがいは単なる異文であることもあるが、またしばしば意図して覆つたものが洩れている場合がある。それをつきつめると、なぜ覆つたかという意図と事情を察しうることもある。わたしにそれがうまく出来るかどうかはわからないが、やってみなければ不可能だったとはいえない。李亮にかえらう。

『旧唐書』^{卷六十一} 淮安王神通伝に「父の亮は隋の海州の刺史、武徳の初め鄭王に追封せらる」とい
い、『新唐書』^{卷六十八} の同じ伝に「鄭孝王の亮は隋に仕えて海州の刺史となり追王せらる」とい

う。鄭孝王の「孝」は諡号である。この鄭王をさきに「大鄭王」とよんだのは、高祖の第十三子の李元懿が貞觀十年六三六鄭王に改封されているため、これと區別するため、元懿のほうはこれに対し「小鄭王」とよぶ。ところで「清」王祖『金石萃編』卷五十七と『全唐文』卷九百九十二に「李孝同碑」があり、そこには「寧州趙興守海州刺史鄭孝王、粹を震軒に表し、雄圖岳立し、東平に軼して響を振わせ、北海に架して英を翔す」という。「粹を」以下の句は飾り文句で上の宥書と同じことを言っているのだ。なお『新唐書』の宗室世系表には「鄭孝王亮、隋の趙興太守長社郡公」と記す。

これらの記事には共通したところもあるが違ったところもある。王祖はそれに注意している。隋書地理志には寧州趙興の名がない。海州はもと東莞・瑯琊二郡の地で、東魏の武帝の七年に海州東彭城郡をおき、始めて海州の名があらわれる。齊・周朝に朐山・東海二郡をおき、隋の開皇の初め東海郡を廃し、大業の初めにまたおき、舊の初めに始めて海州東海郡をおき、河南道に所屬させた。それなら隋代には海州なんぞあるはずがないのに亮はどうしてその刺史になったのか。これは碑伝と地理と合わない。長社もまたこんな郡名はない。東魏に長社県があり潁川郡に所屬し、武帝の七年に縣は廢され、隋の開皇六年、その地に長葛縣をおいた。すると表にいう長社郡公というのもまた合わない。

鋭い指摘だが、これをそのまま受けとってよいかどうかを確かめておこう。『隋書』地理志には郡名としてはたしかに「寧州趙興」の名をかかげてはいない。しかし全く見えないわけではな

い。北地郡の注に「後魏に幽州をおき、西魏に改めて寧州とし（隋の）大業の初めにまた幽州と
 いた」といい、その郡の安定県の注に「もと趙興郡をおいたが、開皇の初めに郡は廢され、大業
 の初めに北地郡をおいた」といっているのである。「宋」樂史『太平寰宇記』卷一百一寧州の条に、
 らに詳しく説明する「魏書地形志にいう。趙興郡を改め、太和十一年（四七〇）改めて班州とした。二
 十四年（四八〇）改めて邠州とし、二十四年（五〇〇）邠を改めて幽としたのは古代のこの地の名を取ったの
 だ。庾帝の三年（五三三）邠州を改め寧州としたのは安寧であるようにというところを取って名とした
 のだ」と。のち邠州をおき、趙興郡をおき、隋の初めも同様だったが煬帝になってまた改めて幽
 州とし、ついで幽州を廢し、趙興郡を改めて北地郡とした。……唐の武徳元年（六一八）北地郡を改めて
 寧州とした。いまの『魏書』地形志の記事は、ここに引用されたものほど詳しくない。引用され
 たものが古い形を保存しているのだろう。それにしても肝心の隋にはいつてからのことがこのま
 までよくわからぬ。けれども『隋書』卷一開皇二年四月丁丑に「寧州刺史の審蒙定を左武侯大
 將軍とす」とあるから、このころは邠州でも幽州でもなかった。同書卷三地理志に「開皇三年、
 遂に諸郡を廢した」といふ。それならば、隋が國を建てた開皇元年（五八一）から三年（五八三）までは寧州
 趙興郡はあったわけで郡守ももとより存在した。なお三年六月乙丑に河間王（楊）弘が寧州總管と
 なった記事があり、その前後に州刺史が州總管となる記事が頻出する。おそらく郡を廢止するに
 関連する措置だったのであろう。

「海州」については「隋書」^{卷三十一}地理志の東海郡の注に「梁朝に南北二禹州をおき東魏朝に改めて海州とした」という。これだけではよくわからぬが「太平寰宇記」^{卷三十三}海州の条に「魏の武定七年^(五四三)齊・冀二州を改めて海州とし政府を旧州の南のもと龍沮城であったところに移した。隋の開皇三年、瑯琊城から州を今の政府に移した。大業三年^(六〇五)州をやめて郡とした」という。「今の政府」所在地は胸山県(江蘇省東海縣)である。なお「武定」は原本に「武帝」とするけれども「元和郡縣志」に於て改正した」と重校刊本(校者「須陳翰森」)の注にいう。それならば政府所在地に移動はあっても、海州そのものは隋にはいつてからも大業三年まではあつたことになる。この推測があやまっていなければ、李亮は開皇元年二月隋建国と同時に寧州趙興郡守に任ぜられ、三年五、六月の郡の奏止前後に海州刺史に昇進した、と考文られなくはない。

「長社郡」王昶のいうように、どうやらどの時代にも見出せない郡名であるらしい。問題の宗室世系表は貴重な文献ではあるが誤りの多いことでも有名だ。李亮が「長社郡公」であつたか否かは、あまりせんさくすることはいらぬだろう。

さて、李亮の子が李神通と李神符で、神符の死んだのが唐の第三代皇帝高宗の永徽二年^(六五二)で行年七十三歳だつたことは西「唐書」一致する。すなわちその生年は周の宣帝の大成元年またはその年讓位された静帝の大象元年^{五九八}である。神符が幼少にして孤であつたすなわち父をなくしたということも一致している。「礼記」の曲礼に「人生れて十年を幼」と記すから、仮に神符十歳の年に李亮が死んだとすると、それは隋の文帝の開皇八年^{五八八}だ。さきに推測したよう

に開皇三年に海州刺史となり、それから六年めに死んだとするなら、決して不自然ではない。(あるいはその死は数年さかのぼるとも考えうる。行年は子の年から考えると三十五歳から五十歳の間だろう。假に四十歳とするとその生年は西魏の文帝の大統十五年^{五九〇}。周が國をたてた五五七年に亮の父李虎が死んでいたことは確かだが、大統十五年はその九年前。亮は虎の第八子だから幼少で父に死にわかれたことも自然であろう。

以上のことをまとめると「李亮は、李虎の第八子として五五〇年前後に生れ、(周に仕え)隋朝に入って寧州起興郡守となり、ついで海州刺史となり五九〇年前後に死に、唐建国の武徳の初め鄭王に追封された。子に、神通と神符がいる」といえばよいであろう。なお、起興郡は陝西省安定県へ延安の東北約七十キロメートルの地)、海州はさきに記したように江蘇省の北端に近い東海県である。

*〔漢〕謝啓昆「西魏書」^{きよ}李虎伝には亮の死を恭帝元年^{五五四}五月とする。

四

李神通の公的生涯は、唐の建国に終始した。かれの名が正史にあらわれるのは、唐の第二代皇帝となる李世民が、父であり唐の初代皇帝となる李淵をそそのかして、いわゆる起義つまりはかれの仕える隋朝に対する反乱を決行したその時にはじまり、世民が兄の太子建成、弟の齊王元吉を殺し、父高祖の譲りをうけて皇帝となったその四年目の貞観四年に死をもって終っている。

わたしの筆もいくらかは史家の筆をなぞらないわけにはけかぬ。

神通の死んだ月日も行年も、新・旧『唐書』『資治通鑑』のいずれにも記さぬ。したがってその生年もわからぬ。しかし、弟の神符が生れたのが五七九年で、神符の伝に「兄につかえ友悌をもつて闇こゆし」というから、神通は神符より四、五歳は年長で、父の李亮の死んだ五九〇ごろにはすでに十五歳ぐらいになつていたように感ぜられる。するとその生年は周の武帝の建徳四年五七五ごろ、父李亮の二十五、六歳の時ということになる。あまり不自然でもなさそうだから、ここではそう仮定して話を進めることにする。確かな資料にぶつかればいつでも訂正する。

神通がどこで生れたかは、父亮の趙郡守となる以前の官歴とかかわりをもつか、それがわからないと知りようがない。ただしその家居の地は長安かその付近であつたらうとはいえる。家墓の所在がそのことを示す。亮の曾祖父熙の墓（建初陵）祖父天賜の墓（啓運陵）は共に趙州昭慶河北省隆平縣にあるのに、父亮の墓（永康陵）は京兆府三原縣界陕西省三原縣にあり、兄昉の墓（興寧陵）は京兆府咸陽縣界にあり、いずれも唐の長安の北郊である。そこは周朝の都でもあつたら、亮の赴任によつて転々とするこゝにはあつても、神通はやはり都の人であつたらう。

さて、李神通が五七五年に生まれたとすると、かれの七歳の五八一年二月、周の相国で隋王である楊堅が皇帝となり、周は亡んだ。神通の父李亮は、たぶんこの年、寧州趙興郡守となつた。神通が十歳になつた五八三年ごろ、亮は海州の刺史に昇進した。神通もそれら任地にもなつたことであらう。神通十五歳の五八九年かその翌年五九〇年ごろ、父の亮は死んだであらう。三

年の長があげたとき神通は十七、八歳で、おそらくその年、官途についたであろう。かれの父兄の李淵は、五六六年生れで、かれより約十歳年長だが、七歳で父高祖の唐国公を襲爵し、隋の開皇元年五八一十六歳で千牛備身天子の侍衛になった。神通の初任は淵のそれよりは低かったらうと察せられる。

五九八年開皇十八年淵の次子李世民が生れた。長子李建成五九生より九歳年下である。この年神通は二十四歳ぐらい。『新唐書』は神通の性格を評して「少わかくして輕俠」という。世民の生れたのは新唐書に
いへば五九九年である。隋の初代の天子文帝楊堅は、開皇九年、南朝の陳を亡ぼし、ここに、長い間分裂していた中国を統一した。文帝は内治外交に努力し、即位のはじめの四百万に満たなかつた民戸が二十年後には九百万に及んだといわれる。ところが開皇二十年、太子の勇を褒して次男の広を太子とし、広の密謀によつて四年後の仁壽四年六〇四急死した。毒殺されたのだともいう。第二代天子がこの太子で、すなわち煬帝である。

煬帝は通済渠・永済渠などの大運河を開き、長城を西に延長した。これらは以後の中国の交通・運輸・防衛に大いに役立ったが、この大土木事業に人民を徴發使役し苛酷を極めたため、人民の暴動反乱が各地に起り、官僚や軍閥がこれに便乗し、ふたたび天下は騒乱する。

大業七年六一煬帝は高麗を征討するため山東に本營をおき国境地帯に兵燹・物資を集結した。士卒の半ばは死亡し、物価が急騰し、生活できなくなつた人民は群盜となつた。十月、鄆平の民の王薄が群盜の指導者となつて長白山で兵をおこし「遼東で犬死にするな」という歌を作つ

て呼びかけたので、逃亡した將兵や軍属がみなその部下となった。これがぎっかけとなり、同じ月のうちに潼南で竇建德が、河曲で張金稱が、清河で高士達がそれぞれ兵を起した。〔隋〕煬帝の「隋書之隋月表」は、二の年から唐の太宗の貞觀二年にいたる十八年間の叛乱軍の指導者・興起の年月・状況を表にしたもので、そこにかかげられた指導者は百三十七人にのぼる。唐朝をたてた李淵らの名はあげてなく、また小集団の長ははぶかれていゝるから、それらをこめれば何千という集団が蜂乱にふみ切つたものとみてよい。百三十七人のうち早い時期に兵をあげた隋の高官としては礼部尚書の楊玄感があり、天子を自称しあるいは天子に推されたものに劉元進・格謙・孫宣雅・向海明・李弘・劉伽論・劉苗王・王須拔・朱榮・林士弘・薛寧・宇文化及・王世充らがあり、李淵と覇を争つた強豪として劉黑闥・李密・宇文化及・王世充などをあげることができらるであらう。

大業十二年六六七年七月、煬帝は江都揚州江都郡に遊び、そこに居すわって、洛陽の都に帰らない。十二月、李淵は太原出處留守となった。淵はこころひそかに大變よろこび次男の世民にいた、た「唐はもともとわが国だが、太原こそその地なのだ。いまわたしがここに勤務することになったのは、天がお与えくださったものだ。お与えくださったものを取らなければ、かえつておとがめがあるう」唐はわが国とは、かれが唐国公に封ぜられていたことをさすのであらう。しかしそれは当時の制度では名誉称号であつて實際にその地を領有したわけではない。ところが留守代理長官とはいへそこを治めることになつたのは天与、すなわち天命がわたしに下つたのだ、といつてい

るのだ。この言葉は(意)温大雅『大善創業起晉注』にみえる。起晋注とは天子の言動の記録である。淵のいった天与が、遂に太原地方をさすのみでなかつたことは、その前の、ひそかに大いに喜んだことの中に露呈している。淵は長男の建成に命じて、河東地方におけるすぐれた人物を求めて交りを結び、世民に命じて太原地方の豪族との結びつきをかためさせる。ふたりは父の意向をうけ「財を傾け施を賑賑にし、身を卑卑くし士に下つた」と起晋注にいう。積極的に人気とりを始めたのだ。やがて淵に「四方の志があることを素し、深く自ら結託す」起晋書卷五とる劉文靜のような人物が、かれらの周囲に集まりはじめた。

大業十三年五七〇李淵は五十二歳、次子世民は二十歳だった。淵は運が向うからやってくるのをじっくり待った。それが若い世民には歯がけかつた。世民は淵のとりまきを觀察して裴寂に目をつけた。そうして自分の腹心の高斌兼にいつて寂を誘わせ、自分も加わつて博奕をやつた。やるたびに何十万という大金をかけ、世民はどんどん負け、氣前よくかけ金を寂に払つた。寂は世民の氣っぷに惚れこんでしまつた。それを見てとつた上で、世民は計画を寂にうちあけた。

当時、寂は晋陽宮の副監であつた。晋陽宮は隋の太原離宮である。寂は宴会をして淵を招き、宮女をはべらせた。淵が酔っぱらつて宮女をだきいい機嫌になつているとき、切り出した。

「あなたの次男の世民どのが義旗をあげようとしています。わたしがつうっかり宮女にサービスさせたのをうるさい連中がかぎつけてしまつたらしい。あなたも思いきつてこの際、義兵をあげたらいかげす。あなたなら天子になれますよ。ぐすぐすしてたら、官吏のくせに天子の宮女と

私通したかどで、まあおそかれ早かれ死罪です」

五

隋の大業十三年^{六二七}五月、李淵はついに太原で兵を起した。隋の官軍は李淵の族人を搜索逮捕しはじめた。淵の子の智雲は河東でつかまり長安で殺された。

李神通は当時、長安にいたが、あぶないところを逃亡し、郊外の鄠県の山中にかくれた。山中で病気になる、数十日も寝こんだ。食べ物もすっかりなくなる。長男の道彦がぼろをまとって町に出、乞食をして食物を集め、神通を養った。このとき神通は四十三歳前後であった。

神通は、この間にも子や部下を使って情報をあつめ、目ぼしいところに対して連絡をとったのである。みやこ長安の大俠客として知られた史万宝や、河東の裴勣、柳崇礼らと結んで兵を挙げ、李淵の重に呼応した。

李淵のむすめで後に平陽公主と呼ばれる人が柴紹という人と結婚していた。淵は兵をあげる直前に、長安に住む柴紹には連絡をとっていた。紹は妻に相談した「おとうさんが兵をあげるというっておられるが、二人づれではいけません。といってここに留まってはやられるにきまつている。どうしたのかし妻「あなたはとにかく急いでおとうさんのところに行ってください。わたしは女だからかくれやすいでしょう。あとはなんとか考えます」柴紹が出かけると、妻は鄠県の別荘

にゆき財産を整理して、その金で人を集めた。また当時、近郊都市の盤屋^{ちやうちやう}の司竹園を山寨にしていた西域の貿易商あがりの叛乱軍の首領何潘仁を説いて身方にした。

神通は平陽公主に連絡し、西方の軍勢をあわせて鄂州に進出した。一万人以上になっていた。神通はみずから關中道行軍總管と称し、史万宝を副總管、裴勣を長史、柳崇礼を司馬、令狐德棻を記室と呼んだ。長安の官軍がしばしば神通らの軍を討とうとしたが、かえって撃破された。李淵らの軍が南下して黄河をわたると、神通らの軍がこれを迎えた。淵は神通を光祿大夫、子の道考を朝請大夫とした（旧唐書では、神通が關中道行軍總管と自称し淵の義軍に加擔することを世に示したときこれを聞いて悦んだ淵が神通に光祿大夫を与えた、とする）長安を平定入城すると淵は神通を宗正卿とした。

李淵は、煬帝の孫である代王楊侑を迎え、皇帝の位につけ、年号を義寧と改め、江都にいる煬帝を太上皇とした。時に新帝は年十三、恭帝である。

義寧二年^{六二八}三月、江都で、煬帝は臣の宇文化及らに殺された。^{武徳と改元した。}

五月二十日、李淵は、隋の恭帝の譲りを受け、唐朝の皇帝に即位した。二十八日、律令の修定を命じ、国子、太学、四門などの教育機関をおいた。六月一日、三省六部の政治機関を設けその長を任命し、趙公李世民を尚書令としてこれを統括させた。隋の大業律令を突止し、新律令をした。

六日、皇帝は祖先を追尊し、長子建成を立てて皇太子とし、次子世民を秦王、四男元吉を齊王

とし親族を王に封じた。このとき神通は右州衛大將軍を拜命し永康王に封ぜられ、ついで淮安王に改められた。神通の弟の神符は襄邑王に封ぜられた。

十月九日、右州衛大將軍淮安王神通は山東道安撫大使を命ぜられ、善門侍郎の崔民幹が副大使となった。煬帝を殺し、その従弟の楊浩を帝に立て、みずからその大丞相となり、ついでその帝を殺し、魏郡河北省大名縣で自ら皇帝となった宇文文化及を討つのが当面の目標である。

武徳二年六二九正月十八日、神通は魏郡に化及を撃つ。化及は抵抗しきれず、魏郡の東約八十キロメートルの聊城山東省に逃げた。神通は魏郡を占領し、二千余人を殺しあるいは捕獲し、兵をひきいて化及を追い、聊城を囲んだ。包囲が一ヵ月余に及んだ。聊城では食糧がなくなっていた。このころ叛乱軍の首領で唐の李淵と匹敵するほどの勢力を握っていた竇建徳が宇文文化及討伐のため聊城にむかっていた。閏二月、化及は神通に降服を申し入れた。神通は許さない。副使の崔民幹新・旧唐書は崔幹とし竇治通鑑はさきに崔民幹といひ後に崔世幹という、いずれが正しいのか今のわたしにはよくわからない。が降伏を受けいれるように勧めたが神通がいう「將兵たちは長い間、風雨にさらされてきた。敵は食糧がなくなりどうしようもない。勝利はまだかだ。攻めとって唐の國威を示し、また戦利品で將兵をねぎら、てやらねばならぬ。降伏を受け入れたのでは手える賞品もないじゃないか」民幹「いまにも竇建徳がやって来ます。それまでに宇文文化及を平げておかなかつたら、内外に敵をもつことになって、わが軍はきつと敗れましよう。攻めずに下すほどらくなことはないのに、財宝に目がくれて降伏を受けいれないという法があるうか」神通

は怒って民幹を軍中に拘禁した。そうこうするうちに化及の弟の宇文士及が濟北山東省から食糧を聊城に送りこんだ。化及の軍はやや勢をとりかえし抵抗しはじめ、神通が差圖して攻めていると貝州刺史の趙君徳がするすると城壁にのぼりはじめた。神通は君徳が機から先陣の功をうばうのをにくみ、攻軍の手をやめる。君徳しかたなく、ののしりながら下りる。その間に化及の方は城をかためる。神通は数千人の兵をわが魏州へ攻具をとりゆかせるが、これも途中で戦って敗れる。竇建徳の軍が到着する。神通はやむなく退却する。二日のちに建徳は聊城に入り化及をとらえた。

神通は相州河南省安陽縣に退いて軍勢を立てなおしていた。三月、鄭善果という男をとらえ長安に送ったが、皇帝は善果を優待し、左庶子、檢校内史侍郎に任命した。善果は隋の大理卿で、宇文化及が煬帝を殺したのち、化及の臣となり民部尚書を与えられ、聊城では化及のために督戦し、流れ矢にあたった。竇建徳が聊城を陥したとき、自殺しかけたが救われ、建徳の待遇がよくないため逃げ出して、神通につかまつたのである。

八月、神通は洛州河南省洛陽にいたが、竇建徳が十余万の兵をひきいて洛州に向つたとき、相州に退いた。十一日、建徳は洛州を陥し、十九日、相州に向つた。神通はこれをきき南下して黎陽河南省滑縣の李世勣へ旧唐書を徐勣とする。徐はのち李姓を与えられた。世勣を旧唐書が勣とするのけさきの崔民幹あるいは崔世幹のばあいと同様に太宗の諱世民にはばかつてのことだろう。ものもとにいった。九月四日、相州は建徳の手で陥ちいた。

(昭和辛亥三月五日—三十日)